

# ミステリ読書案内

2021. 2. 18 発行元

第205号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 「北斎ミステリ」特集

このところ続けて江戸の絵師「葛飾北斎」関りのミステリを3冊読んだ。私の好きなテーマのひとつなので特集を組んでみた。「写楽」もそうだけれども、謎の部分があり、ミステリの恰好の題材と言えるだろう。

私は美術、とりわけ絵画が大好きだ。日本のものでも海外のものでも何にでも興味がある。ミステリの世界でも「美術ミステリ」を得意分野とする作家が何人かいる。今回のテーマの「北斎」もたびたび取り上げられてきている。高橋克彦の『北斎殺人事件』などもその代表と言えるだろう。最近の作品ではどうなっているのだろうかということ。

### 望月諒子「哄う北斎」

昨年の7月に光文社から書下ろしのソフトカバー本として出版されたもの。望月諒子は日本ミステリー文学大賞新人賞を受賞した『大絵画展』が注目を集めた作家。その後の『フェルメールの憂鬱』と続いて、本作『哄う北斎』が絵画ミステリの第3弾に当たる。表紙絵に北斎の『神奈川沖浪裏』を模したデザインが使われていて目を引く。

スタートはクリムト。さて、「クリムト」と言って世の中ではどれくらい知られているのだろうか。特異な画家なので印象深い人ではあるのだが…。イタリアの美術館から盗まれたクリムトの絵画『婦人の肖像』

が日本の美術商の元に突然現れ30億円での取引が噂される。この絵が本物か偽物かもポイントになるし、取引がどんな駆け引きで推移していかも大切な部分になっている。時を同じくして、明治期のフェノロサ・コレクションの一部が日本に戻ってきている話が湧きあがり、その中に含まれるとみられる北斎の肉筆画が注目されるようになる。こちら本物が偽物なのかが話の筋の重要な要素になっていく。関わる人たちの人物像と、騙し騙されの流れが読みどころになっている。

### ちょっと分かりづらさが弱点

題材がなかなか面白いのだが、全体的に見て、分かりづらさがこの本の弱点かなと思ったりする。

章というか、各部分というか、視点が次々変わるのだが、「誰が」が直ぐ明示されていないので、読んでいてまごつく。人物の名前が読み手に定着しない。また、クリムト作品と北斎肉筆画が今一つ結びつきが良くない。事件を複雑化させ、奥行きを作っているのはわかるのだが、すっきりしない不満が残る。

### 風野真知雄

#### 「葛飾北斎殺人事件」

昨年12月に実業之日本社文庫から出たばかりの本。『歴史探偵・月村弘平シリーズ』の9作目に当たる。風野は基本は時代小説作家なので、歴史ものは当然のごとお手の物。シリーズ第一作は『東海道五十三次殺人事件』だった。

名探偵役の歴史ライター・月村弘平は、今回は北斎の「富嶽三十六景」めぐりの歴史ミステリーツアー旅行に参加。両国の「すみだ北斎美術館」をスタートに「三十六景」のいくつかを回る。そして富士山の五合目で死体と遭遇。一方、月村の恋人の警視庁刑事・上田夕湖は東京スカイツリーに近い北斎ゆかりの寺で発見された有名デザイナー・近田流星の窒息死の事件を捜査することに。

両事件ともに北斎関りの部分があり、解決に結びつく手掛かりになるのだが、北斎そのものの人物像や作品・作風などを深く掘り下げているわけではない。風野ミステリは、サラサラっと読める気軽さが特徴なので、そう思っ一気に最後までたどり着くのがよい。事件は意外と現代的。ちょっとした錯覚を与えるトリックらしきものも登場してくる。

### 山本巧次「大江戸科学捜査 八丁堀のおゆう 北斎に聞いてみる」…2017年の宝島社文庫書下ろし。

『大江戸科学捜査 八丁堀のおゆう』シリーズの第4作。このシリーズ全体については、後日特集を組む予定。

上記の2作品は現代ミステリで、北斎は絵画作品としてしか登場しないが、この『北斎に聞いてみる』は江戸時代を舞台にした時代ミステリなので、北斎自身が登場する。特にこの作品の中では、北斎の娘・阿栄が重要な役目を担っている。実際、阿栄は長寿の北斎の生活を晩年まで支え続けた人物として知られている。北斎の肉筆画の真贋に関わる問題と、贋作作りに関わる人たちがこの作品の中心テーマ。シリーズの定型として、名探偵役の「おゆう」と南町奉行所定廻り同心の鶴飼伝三郎が、絵の売買に関わったと思われる仲買人・鶴仙堂の主人の絞殺死体を検めるところから事件は展開していく。実は「おゆう」は、現代人がタイムトンネルを通じて江戸時代に来ているという秘密があるので、現代科学を利用できるという「超能力」を備えている。それで、事件の解決を真実に向けて密かに引っ張ることが可能になる。果たして、今回の結末は…という話。

それにしても、「美術ミステリ」はどうしてこんなに「贋作」だらけなのだろうか。お金が絡むのが第一だろうけれども、「謎」が作りやすいのだろうか。画家本人に関わる謎や作品の謎のミステリも読みたい。